

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト  
地域包括および子育て世代包括ケア先進自治体調査と地域人材交流研修会開催報告会

**見えてきた！**  
**地域ぐるみで、みんなまるごとケアのヒント**  
**市民発 ごちゃまぜ 真剣 まるごとケア**

日時：2020年2月8日（土）13：30～16：30

場所：日比谷図書文化館コンベンションホール

**見えてきた！**  
**地域ぐるみで、みんなまるごとケアのヒント**  
**市民発 ごちゃませ 真剣 まるごとケア**

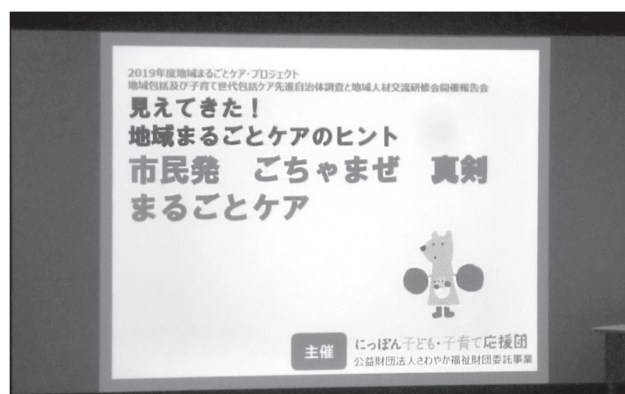
平成から令和へと元号が変わった2019年度の「地域まるごとケア・プロジェクト地域包括および子育て世代包括ケア先進自治体調査と地域人材交流会開催報告会」を、令和2年2月8日（土）、東京・日比谷公園にある日比谷図書文化館コンベンションセンターで開催した。

2015年度からスタートした地域まるごとケア・プロジェクトの5年目。これまでにヒアリング、地域人材交流研修会で関わらせていただいた自治体は52自治体となった。5年間の調査から見えてきた、「地域ぐるみで、みんなまるごとケア」のヒントを市民発・ごちゃませ・真剣・まるごとケアの4つのキーワードに込めてご報告しようと企画した。

基調講演では、地域子育て支援拠点を展開、関わるのがほぼ女性ということに気づき、団塊世代の男性に向けて「現役時代の名刺で勝負！」と、現役時代に培った知見を子育て支援やまちづくりに生かしてもらえないかと呼びかけ、子育て・まちづくり支援プロデューサー養成講座を経て、地域子育て支援拠点を中心に地域で活躍する男性を増やしている恵泉女学園大学学長の大日向雅美さんに、その経緯などをお話いただいた。

後半は、2019年度にヒアリングや地域人材交流研修会開催で出会った市民活動団体3者からの報告と提言。児童虐待に関する重篤な事件発生を踏まえて、札幌市内で子ども・子育て支援に関わる官民の12の事業担当者を集め、直接行政担当者と支援関係者を交流させる地域人材交流研修会を企画したNPO法人子育て応援かざぐるま代表理事の山田智子さん。初めて「移動支援」をテーマに大垣市で開催した地域人材交流研修会に登壇、移動支援は「家族機能の社会化」という視点から考えてはどうかと提案した、特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長の杉浦陽之助さん。今回のキーワードのひとつにもなった「ごちゃませ」の居場所のよさや役割について、富山県下でのヒアリングに協力して下さった一般社団法人Ponteとやま副理事長の加藤愛理子さん。それぞれに関わった地域まるごとケア・プロジェクトのメンバー、山田麗子、青木八重子、當間紀子がナビゲーターを務め、まとめのコメントを大日向雅美さんから頂戴した。

参加者アンケートからは、大日向さん、加藤さんの取り組みへの共感が多く寄せられたほか、「ここにくるたびにパワーをもらえる」、昨年度の報告会でのキーワードTTP（とことんパくる）を覚えていた方など、リピーターもいらっしやる事が確認された。



開会挨拶 公益財団法人さわやか福祉財団理事長 清水肇子

基調講演 「シニア世代男性が子ども・子育て支援と出会うとき」  
恵泉女学園大学学長 大日向雅美さん

休憩

報告と提言 「市民発 ごちゃませ 真剣 まるごとケア」

報告者

- ともに地域で暮らす仲間として何ができるか  
地域子育て支援拠点発 “地域連携” で親子を支える “報告  
NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事 山田智子さん
- 「おとな子どももOK食堂」の現場から  
特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長 杉浦陽之助さん
- 誰も排除しない されない 止まり木のようなカフェ  
一般社団法人 Ponte とやま副理事長 加藤愛理子さん

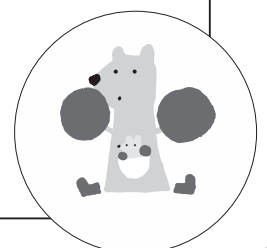
コメンテーター

恵泉女学園大学学長 大日向雅美さん

ナビゲーター

にっぽん子ども・子育て応援団地域まるごとケア・プロジェクトメンバー  
青木八重子  
山田麗子  
當間紀子

閉会挨拶 にっぽん子ども・子育て応援団企画委員 前三鷹市長 清原慶子



2019年度の子育て世代包括及び地域包括ケア先進自治体調査と地域人材交流研修会開催のご報告を申し上げます。

2015年に公益財団法人さわやか福祉財団から、地域包括ケアにおける地域連携の可能性を探り、既存の制度にとらわれない地域福祉・地域づくりに向けた提案・周知啓発を子ども・子育て分野から行う事業を委託され、2017年度で第1期を終了いたしました。さらに2020年度までの3年間、事業継続を受託、地域まるごとケア・プロジェクトを推し進めていくことになりました。

「もっと子育てしやすい社会に！」と2009年に立ち上がったにつぼん子ども・子育て応援団が、なぜ高齢者支援・介護保険行政にもヒアリングを行うのか。初年度はそこから説明を行う必要がありました。しかし、5年の月日の流れの中で、子ども・子育ても当たり前のように地域保健福祉計画の対象として考えられるようになりました。

その一方で重篤な児童虐待事件が相次ぎ、児童福祉法および児童虐待防止法の改正にもつながりました。痛ましい虐待をなくし親子を救うため、地域で孤立しがちな乳幼児親子を、それぞれのニーズに合わせて取りこぼしなく、親子の生活圏内で包括的に継続的支援を行い、虐待の発生を防ぐ「予防的支援」ができる体制づくりが喫緊の課題となっています。

2018年に続いて2019年もこれまでにない天災続きでした。台風15号と19号、さらに続いた豪雨で亡くなられた方々、被災なさった方々に心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

ヒアリングと地域人材交流研修会でお邪魔した自治体は、累積で52となりました。どの自治体にも「ともに同じ地域で暮らす仲間として何ができるか」と、アクションを起こし、地域の拠点や取り組みを展開、行政を巻き込んで、お互いの腕も腹も知り合いながら信頼を積み重ねて行く人々の姿がありました。一見垣根のない、ごちゃまぜの緩やかな居場所。緩やかだからこそ、困りごとが引き寄せられての真剣勝負が常に潜みます。見立てのプロフェッショナルが必要なところにつなぐ、実のあるネットワークが各地で展開されている様子には頼もしささえ感じられます。

地域ぐるみで支え合う子育て環境づくり、地域まるごとケアの実現を加速させる、市民発の地域の取り組みが各地で始まっています。このプロジェクトが、発展の一助になれば幸いです。

につぼん子ども・子育て応援団では、2012年度からひとつの目標を掲げて取り組んでいます。家族まるごと、地域全体で支え合うことを目指す今回の調査が、応援団の目標達成に向けた、重要なテーマと重なる理由として、ここに掲げておきます。

### につぼん子ども・子育て応援団の目標

すべての子どもたちが、家族の愛情に生まれ、  
また、子ども同士の積極的な関わり合いの中で  
そして、地域や社会の多くのおとなたちの慈しみの中で、  
心豊かに成長できる環境を保障すること

※「子どもは家族が育てるのか、社会が育てるのか」というとらえ方ではなく、子どもを真ん中において、子どもの成長にとって不可欠な、家族、子ども同士の関わり、地域や社会の多くの人との関わり、それぞれが大切な役割を果たせるよう支えるという考え方に立つことが重要です。

今回、自治体の行政担当者やNPO市民活動団体のみなさまが、その調査趣旨をご理解くださり、ヒアリング先の紹介からヒアリング日程の調整までを、地域人材交流研修会の会場やテーマ選定から当日の運営までを担ってくださったこと、地域人材交流会に多くの方が参加していただき、闊達な意見交換をしてくださったことに、心から感謝申し上げます。

2020年2月  
につぼん子ども・子育て応援団

## 調査概要

地域全体の福祉を考えたとき、同じ地域で暮らすもの同士の支え合いが自然に行われているのが望ましく、実際に人々の暮らしを支える資源はシームレスである。高齢者対策と子ども・子育て支援対策、障がい児・者対策、生活困窮者対策など、公的制度によってそれぞれの支援メニューは分断されているが、困りごとを抱える人や家庭に求められる支援もまた、シームレスである。地域での暮らしを考えたとき、制度によって分断されたこれらを、困りごとを抱える人や家庭の実情に合わせてフレキシブルに利用できることが求められているのではないだろうか。

介護保険制度から生まれた「地域包括ケア」という考え方は、介護の世界に留まらず、地域で暮らすすべての人々に広げられるべきではないか。制度によって分断された各種支援事業を、地域で暮らす人々をまるごと包み込むように利用していけるようになることこそ、地域での暮らしの実態にふさわしい仕組みになるのではないだろうか。

地域包括ケアを全世代に向けてとらえ、実施していくことを「地域まるごとケア」と名付け、これを実現させていくために、子ども・子育て支援における利用者支援事業などの実態を把握、目指す方向性を探りながら、生活支援コーディネーターや生活困窮支援コーディネーターなど、地域での暮らしを支える他の専門職との連携についても、提案していきたい。

## 第2期地域まるごとケア・プロジェクトの概要

第1期プロジェクトを経て、高齢および子育てをつなぐ形で地域づくりや地域福祉を進める自治体も見えてきたところから、自治体へのヒアリングと地域人材交流研修会の開催を行い、地域保健福祉およびまちづくりに子ども・子育ての視点を盛り込み子ども・子育てにも目配りをした実践を積み上げていくこと、その周知と啓発を進めていきたい。

当初予定では「子育て支援コーディネーターと生活支援コーディネーターなどの連携に着手し始めた自治体を、地域まるごとケア先進自治体として調査」の予定であったが、利用者支援事業・特定型を進める自治体が多く、地域連携を生活支援コーディネーターとともに行なえる環境にある自治体は数少ない。これまでと同様、地域包括および子育て世代包括ケアの先進自治体であるとともに、厚生労働省の「我が事・丸ごと」地域共生社会推進本部が進めようとしている地域福祉計画策定と推進の努力義務化に伴う形で、地域自治による地域福祉計画の推進を図ろうとしている自治体をピックアップ、多職種多分野の地域連携の実際を探っていく。

地域連携による地域まるごとケアの周知と啓発のため、地域福祉人材の交流をも兼ねた勉強会を複数回、場所を変えて開催。人が集まりやすくカウンターパートがいる自治体を選ぶ。

### ・第2期プロジェクトメンバー：にっぽん子ども・子育て応援団運営委員

高祖常子（NPO 法人児童虐待防止全国ネットワーク理事）

鶴見梨絵子・千葉梢（日本労働組合総連合会生活福祉局）

山田麗子（遊育編集長）

にっぽん子ども・子育て応援団事務局

青木八重子、當間紀子

アドバイザー：牧野カツコ（にっぽん子ども・子育て応援団運営委員 NPO 法人高齢社会をよくする女性の会）

アシスタント：葦澤美也子、新真依子、小山麗子、堀田康子

\* 地域まるごとケア：東近江市永源寺診療所所長の花戸貴司さんが、三方よし研究会が目指すものとして掲げているのが「地域まるごとケア」。「年老いても、認知症になっても、独り暮らしであっても安心して生活ができる地域」を作るには、「我々専門職が提供する「地域包括ケア」と、非専門職が支えあっている「互助」を地域の中でつなぎあわせること」、さらに「これらのスキマをうまく埋める「地域まるごとケア」ができれば安心して生活できる地域になると信じている」。にっぽん子ども・子育て応援団では、「地域包括ケア」を赤ちゃんから高齢者まで、地域で暮らすすべての人々に向けた取り組みとしようという目標を掲げていることから、花戸さんの許可を得て、今回の3年間の取り組みで目指したい姿として、「地域まるごとケア」を使うこととした。



## 開会挨拶

### 公益財団法人さわやか福祉財団理事長

#### 清水肇子



みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきましたさわやか福祉財団の清水肇子でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、子ども・子育て分野の取り組みにご活躍されているみなさん、地域づくりに本当に日ごろから力を尽くしてくださっているみなさんにお集まりいただいております。北海道から九州までご参加いただいているということで、週末の貴重なお時間本当にありがとうございます。冒頭、僭越ですけれどもちょっとお時間を頂戴しましてお話をさせていただきます。

さわやか福祉財団は、およそ30年になりますけれども、子どもから高齢者まで、もともと赤ちゃんも含めまして、誰もが、ふれあい助け合いながらあたたかい地域をつくろうよと、そんな地域の仕組みづくりをみなさんと一緒に進めて参っております。につぼん子ども・子育て応援団さん、当時につぼん子育て応援団さんですけれども、一緒にこのプロジェクトをやらせていただいて5年が経ちました。あっという間の5年だなというのが実感です。

みなさん、いろいろなご活動を取り組みされてきて、5年前をどんなふうに思いますか？ つい、この前のような気がします。通ってきたところはあっという間に感じ、先に向かうのは課題が多いな、長いなと思うところもあるかと思っておりますけれども、でも、一つ一つを思ってみますと、着実に時流というのは進んでいるのだらうと思います。

当時、5年前、私どもが一緒にさせていただいたときが2015年です。ご承知のとおり、一つは介護保険で、地域づくりに大きな動きがございました。要支援1・2に該当されるみなさんの基本的な生活支援、困りごとは、地域でいろいろな形で支える方向にいきましょうと。今それについて、さらにどのような仕組みにすべきかという議論が、いろいろなされているところです。無理な押しつけはもちろん論外ですが、やはり多様性・いきがい・お一人お一人の参加ということを考えますと、地域の受け皿をしっかりつくっていくということは、まさに時代の流れだと思っております。そのポイントが、本日のまさにタイトルになっている「ごちゃまぜ」そして「共生」です。そして、この「共生」という理念も少し前に比べますと、相当私たちの生活の中に根付いてきたように思います。

残念ながら、その間痛ましい事件ですとか、事故、虐待などもありました。そういったものも、私どもはしっかりと自分ごととしてとらえていきながら、地域として、一市民、住民として何ができるのかということに、向き合っていく必要があるのだと思います。

それを考えますと、もう一つ、2015年は、ご承知のSDGsがニューヨークの国連でアジェンダが採択された年でもあります。まさしく、この2015年というところから15年先、2030年に向けて、今それぞれに全国、国を含めまして、誰一人取り残さないという目標を持って取り組まれている。自分ごとで“支え・支えられ”という、一方向ではない、そういう主体的な関わり方というのが、実はこのSDGsでも基本の考え方です。

ちょっと振り返ってみますと、2000年、その15年前ですが、MDGsというのがあったご記憶があるでしょうか。MIはミレニアム、2000のミレニアムですね。これはご承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、思い起こしますと、もちろん広く発展途上国へのいろいろなご支援もあったんですけども、どうも実はあまり評判が良くなかったところがありました。何かというと、これは「先進国の先進国による途上国のみなさんへの支援」ということが一つ課題としてありました。進んだ部分、救われた部分、ご支援で可能になった部分もいろいろあるけれども、でも、自分たちだってこういう考えがある、こういうふうに進めたいんだ、そんないろいろな思いがありました。そして、MDGsで課題があまり解決できていないところを次の新しい前進として、このSDGsというものができてきたと思います。

なぜこの話をするかと言うと、日ごろ私が地域でいろいろ取り組んでいますときに、企業さんは事業や投資にも関わってきますから、非常にSDGsに関心をもってくださいますが、それと地域づくり、地域の支え合い・助け合いというのが、どうもなかなか一致しない方々もいらっしゃる。でも、申しましたように向かう方向はもちろん一緒に、それぞれの地域がどういう目標をもってそれに取り組むかということが本当に大事だと思います。

ただ、同じように地域づくりの観点から、もう一つ勝手ながら思いますと、SDGsは2030年がゴールとなっています。また再度、次の10年、15年の計画が立っていくのですが、住民の地域づくりというのは、5年、10年で完成するものではありません。また、10年、20年後、地域がどうなっているのかというのを今緻密に考えて、その対策を立てても、10年後に本当にそれが合っているのかは疑問です。10年前、こんなにスマホやAIが進んでいるというのは、専門家ですら想像できていなかった。そう考えると、私どもの住民・市民の地域づくり、お互いさま・助け合いによる活動の一番のポイントは、やはり先ほど申しました、自分たちが主体的に参加していく、自分ごととして考えるという、ここの姿勢を一番の基本に、しっかりと地域の仕組みをつくっていく。住民・市民の活動ですから、押しつけも強制も無理ですし、10年20年かかるんですけども、だからこそ自由ですし、だからこそ工夫ができる。そういった、みんなで関わろうよ、みんなで叶えていこうよという思いを大切に、助け合いの仕組みを地域に広げていくこと、それは、私どもが今目指したいところです。これからますます必要になってくるころだと思っております。まさしく、共生・ごちゃまぜ・多様性というところが、これからも大きな柱になってまいります。

につぼん子ども・子育て応援団さんの取り組みは、委託という形でさせてもらっていますが、同じ思いを一つにする仲間同士です。みなさんもお一緒に連携する仲間のみなさんだというふうに、改めて思っております。

ちょうど昨年の9月に大阪で、同じような思いを持った人、みんなに参加しましょう、集まりましょう、情報を交換しましょうというサミットをやらせていただきました。無謀にも54分科会を設けたんですけれども、その中で子どもの分野、まさに子育て支援についての分科会を、につぼん子ども・子育て応援団さんをお願いしました。一番に定員いっぱいになりました。部屋の限りがあり、150名くらいまでなんですけど、それ以上受け付けていたらさらに増えていたことと思います。多くの方が関心を持ち、どんどんお申し込みがありました。

子どもに関連するテーマは、何かできるのではないかと、一緒にもっともっと子育て支援、環境を一緒に考えていけたらいいな、そんな高齢者のみなさんが本当に多くいらっしゃいます。もちろん子育て世代の方々もいらっしゃいます。いろいろな観点から幅広く取り組みを進めていけるように、そのためにはまさしく情報が大事です、その情報を糧にした、つながる力とつなげる力がまさにキーだと思っています。孤立というのが非常に問題になっておりますけれども、地域がみんなでもっともお互いさまであたたかくつながり合うことで、いろいろなセーフティネットになります。大変だよというSOSも気軽に出来るような、そんな地域の暮らし、生活を支えるところをつくっていききたいなと心から願っております。

このあとの基調講演とパネルディスカッション、素晴らしいお話が続きます。それぞれの方のお取り組み、お考えを踏まえ、ぜひ一緒にみんなであたたかい地域をつくっていきましょう。どうもご清聴ありがとうございました。

## 基調講演

### シニア世代が子育て支援と出会うとき ～新たな社会価値の創造に向けて～

恵泉女学園大学学長  
NPO 法人あい・ぽーとステーション代表  
大日向雅美さん



#### プロフィール

恵泉女学園大学学長

専門は発達心理学。お茶の水女子大学大学院修士課程修了・東京都立大学大学院博士課程満期退学。学術博士。

1970年代初めのコインロッカー・ベビー事件を契機に、以来、40余年母親の育児ストレスや育児不安を研究し、地域のNPO活動にも取り組んでいる。

恵泉女学園大学には1989年から勤務、2016年4月から現職。

#### 主な社会的活動

NPO 法人あい・ぽーとステーション代表理事

子育てひろば「あい・ぽーと」施設長

内閣府：社会保障制度改革推進会議委員 / 子ども・子育て会議委員

厚生労働省：(元) 社会保障審議会委員・同児童部会会長

NHK (元) 中央放送番組審議会委員長、住友生命保険相互会社社外取締役を歴任

読売新聞：人生案内回答者

#### 主な著書

単著：『子育てと出会うとき』（NHK出版） / 『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』（岩波書店） / 『子育てがなくなったとき読む本』（PHP 研究所） / 『人生案内 孫は来てよし 帰ってよし』（東京堂） / 『増補 母性愛神話の罨』（日本評論社） / 『おひさまのようなママでいて』（幻冬社） / 『「人生案内」にみる女性の生き方 ～母娘関係』ほか / 『新装 母性の研究』（日本評論社）

監修：(講談社)『悩めるママに贈る心のヒント』（NHK出版）（監修）ほか。

#### 主な受賞歴

エイボン教育賞（2003年）

男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰（2016年）

第70回日本放送協会 放送文化賞（2018年）





## シニア世代が子ども・子育て支援と出会うとき～新たな社会的価値の創造に向けて～

大日向 雅美  
恵泉女学園大学学長  
NPO 法人あい・ぼーとステーション代表

### 1 はじめに

1990年の1.57ショックから四半世紀をかけて成立した子ども・子育て支援新制度も第I期の折り返し地点に。すべての子どもに良質な発達を社会全体で保障するという理念が果たしてどこまで実現されているのか？ 限られた財源の中で優先すべき課題は？ 財源を国や自治体に頼るのではない主体的な取り組みを地域でどのように進めていくべきか？ 子どもと子育て支援をめぐる、なお解決すべき課題が山積しています。

本日は私が2003年から実施している子育て・家族支援のNPO活動の中から、シニア世代、特に団塊世代男性たちの活動の一端をご紹介します。老若男女共同参画で地域の育児力向上とシニア世代の社会参画支援の取組みから芽生えてくる新たな価値の可能性についてお話しさせていただきます。

#### キーワード

- 老若男女共同参画で新たな地域子育て文化創りと生きがい創り
- 団塊・シニア世代男性が“現役時代の名刺で勝負”  
(子育てまちづくり支援プロデューサー)
- 子育て支援とシニア世代支援から新たな社会モード転換の可能性

### 2 今、改めて子ども・子育て支援新制度（2015年スタート）の理念を

近年の子ども・子育てをめぐる大きな変化と子育て支援の必要性を背景として

子どもの育ちと子育て支援をめぐる理念の画期的な展開

### 3 子育て支援の一方で、子育てに戸惑う親たち

親の子育てを見つめる周囲の眼差しもまた親を追い詰める  
愚直なまでに、親と子の生活を見つめ、声を聴くこと

傾聴から見えてくる昨今の子育ての難しさ

#### 4 子育て支援に確かな哲学と新たな地域の絆を（VTR 参照）

NPO 法人あい・ぼーとステーションの実践

行政&市民&企業との協働で新たな地域創りに向けた社会実験

⇒オムソーリー（支え・支えられてお互いさま）の醸成

子育て・家族支援者養成 ⇒老若男女共同参画で地域の育児力向上

とりわけシニア男性の地域貢献⇒“現役時代の名刺で勝負”

（子育て・まちづくり支援プロデューサー：愛称まちプロ）

#### 5 子育て支援に潜む新たな地域創造の可能性

シニア世代の参画で新たな価値の萌芽を実感

⇒競争原理から分かち合いへ

ニーズは“掴む”ものから“創る”ものへ

## ☆トピックス：NPO 法人あい・ぽーとステーションの実践

～子ども・子育て支援新制度の理念の先がけとしての地域・子育て支援の実践～

### (概要)

- ・地域に根ざした子育て・家族支援の拠点となることを目指して 2003 年 9 月・港区に「子育てひろばあい・ぽーと青山」を、2016 年 10 月・千代田区に「子育てひろばあい・ぽーと麹町」を開設
- ・元区立幼稚園&元区立保育園の跡地・施設を活用し、NPOと行政（港区・千代田区）との協働による運営
- ・老若男女共同参画で地域の育児力の回復向上と女性の社会参画支援に挑戦

### (活動内容)

- ・ひろば：親子・祖父母・地域の人等が楽しく集い、子育ての苦楽を分かち合う
- ・一時保育：預かる理由を問わない。母親の再就職活動やリフレッシュを積極的に支援  
“親のゆとりが子どもの幸せにつながる”という考えを基本理念に、  
親の多様なライフスタイルや就労形態に対応する支援を目的としつつ、  
子どもの幸せを第一にした丁寧な保育をめざす。
- ・大学（恵泉女学園大学）との協働で、親子が楽しむ有機園芸（キッズ交流ガーデン）を。  
企業（住友生命保険相互会社）との協働で、団塊世代男性の地域参画支援を実践
- ・子育て中も豊かな学びの機会を：  
各種講座・図書室の整備  
女性の生涯を支援する「生涯就業力講座」を恵泉女学園大学と協働で実践
- ・地域の子育て・家族支援に従事する人材の養成：「子育て・家族支援者養成講座」  
NPO 法人と基礎自治体・企業の協働で、地域の子育て支援に活躍する人材の養成に  
2004 年度から実践。国の子育て支援員研修の先がけとなる。  
港区・千代田区・浦安市・高浜市・戸田市で実践

〈目的〉 子育て支援者の支援力の向上

親と子を支援できる人と場所を地域にたくさん確保

女性の社会参加支援の一つのステップに

老若男女共同参画社会づくり

講師陣は乳幼児教育保育に携わる一線の専門家が担当

行政との密接な連携のもとに運営

認定者へのバックアップ体制（有償活動の保障と認定後の知識技術の維持向上を  
目指したバックアップ講座の実施）の整備

参考：<http://www.ai-port.jp>

## ☆社会保障と子ども・子育て支援のポイント

- ・「社会保障の充実は、社会の活力の基盤。  
社会保障はいずれの世代にとっても負担ではなく、今の困難を分かち合い、未来の社会に  
協力し合うためにあるという哲学を広く共有することが大切。
- ・社会保障を世代間対立にしてはならない
- ・子育てのつらさ・不安等に悩み苦しむ親と子を支援していくことが、社会保障の役割であり、  
「社会の成熟度」をはかる指標

## 市民発 ごちゃまぜ 真剣 まるごとケア

地域まるごとケア・プロジェクトは2015年度にスタート、これまでに33自治体にヒアリング、19自治体で地域人材交流研修会を開催してまいりました。どの自治体でも、発言し活動する市民と、市民の声に耳を傾け、市民に寄り添う施策を展開しようと努める行政マン、さまざまな分野を繋げるコーディネーターや市民活動団体の姿がありました。

2019年度に地域人材交流研修会やヒアリングでお会いした3人の方に、これからご登壇いただきます。

共通するキーワードは、市民発、ごちゃまぜ、真剣、まるごとケアです。

### 報告者

NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事 山田智子さん  
特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長 杉浦陽之助さん  
一般社団法人 Ponte とやま副理事長 加藤愛理子さん

### コメンテーター

恵泉女学園大学学長 大日向雅美さん

### ナビゲーター

につぼん子ども・子育て応援団 地域まるごとケア・プロジェクトメンバー  
山田麗子  
青木八重子  
當間紀子





## プロフィール

### 山田智子(やまだ ともこ)

NPO法人子育て応援かざぐるま代表理事  
NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事



幼稚園教諭6年目に長男を出産して産休6週間後に復職し、年度末に園児と一緒に卒園。退職後に感じた社会から隔絶されたような一抹の寂しさが原点となり、1993年、長女の幼稚園入園を機にかざぐるまに入会。1995年より代表を務め、2005年NPO法人化に伴い代表理事となる。かざぐるまの訪問保育、産前産後サポートを通して、地域に点在し孤独に子育てする親子が繋がる場が必要と実感して2002年からひろばを実施。2005年より、母校である札幌大谷大学短期大学部子育て支援センター「んぐまーま」の立ち上げに協力し、つどいの広場受託。2009年に中央区円山に自前で「子育て拠点てんてん」を開設し、2011年10月より札幌市地域子育て支援拠点事業ひろば型の指定を受ける。「てんてん」では、ひろばの他、利用者のニーズから自主事業預かり保育や2才児の森のようちえん「トコトコクラブ」を行う。全道の支援者向けのスキルアップ連続講座等も手掛ける。かざぐるまは任意団体より33周年となり、いつの間にか孫4人(4月に5人目誕生)。北海道子どもの未来づくり審議会委員、子ども・子育て支援部会委員。

### 杉浦陽之助(すぎうら ようのすけ)

特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長



2011年3月岐阜市で法人設立。  
生きづらさを抱えた若者を中心とした市民の孤立を解消することを目的とした活動を様々に展開。  
その一環「おとなも子どももOK食堂」は、地域まるごと支援の可能性を感じさせ、高評価を得ている。  
2016年から民家を活用した学習支援、子ども食堂と共に駄菓子屋を運営。  
(岐阜市地域福祉推進委員、岐阜市市民活動アドバイザー)

### 加藤愛理子(かとう えりこ)

一般社団法人Ponteとやま副理事長



1955年生まれ。大学卒業後盲学校教員を経て、1994年から20年間富山YMCAフリースクール講師。2014年富山県砺波市に移住し、小さな家とカフェ(みやの森カフェ)を建てる。当初ケアラズカフェとしてスタートしたが、年齢も状況もさまざまな人が集まってきたので、ごちゃまぜカフェに方向転換をした。昨年「庭に小さなカフェを作ったら、みんなの居場所になった(南雲明彦・みやの森カフェ共著)」を出版。引っ越し歴19回。

### 大日向雅美(おおひなた まさみ)

恵泉女学園大学学長

104ページ参照

### 青木八重子(あおき やえこ)

にっぽん子ども・子育て応援団事務局

### 山田麗子(やまだ れいこ)

にっぽん子ども・子育て応援団運営委員

### 當間紀子(とうま のりこ)

にっぽん子ども・子育て応援団事務局

○ともに地域で暮らす仲間として何ができるか  
地域子育て支援拠点発“地域連携”で親子を支える 報告

NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事  
山田智子さん



山田（麗） 札幌では地域人材交流研修会を昨年の12月22日に開催しました。札幌で痛ましい虐待事件があり、阻止できなかったことに無力感を感じ、地域で何ができるかと問題意識を持たれた地域子育て支援関係者が集まって企画しました。当日、雪交じりの中、地域の子育て団体の連携を深めるということで、地域子育て支援拠点や利用者支援など、12事業のブースを設け、各ブースで専門機関と地域や子育て支援関係者が屋台方式で交流を深めました。また事業の運営に地域の子育て支援団体が携わりネットワークが広がるなど、二重三重に新しい事業となりました。詳しい内容については山田智子さんからどうぞ。

山田（智） 札幌から来ました、「子育て応援かざぐるま」の山田智子です。「子育てひろば全国連絡協議会」の理事もしています。札幌は雪が少ないとニュースで報道されていましたが、雪まつりが始まる今週からドカ雪となりました。昨日から膝が隠れるくらいの積雪で、2時間ほど雪かきをしないと外に出られない状況でした。今朝は5時半に家を出て、11時半に会場に着きました。

北海道の地図をご覧ください。日本の国土の22%を、ひとつの都道府県である北海道が占めています。それほど広いので、札幌で研修会を開催しても前泊しないと参加できない地域が多々あり、隣町との距離が遠いため道内のネットワークを作る難しさを感じます。

道庁所在地である札幌市には、北海道の人口の3分の1以上、37%がひとつのまちに一極集中しています。この元旦に市の人口は197万人を超えましたが、200万人に届かないうちに減少し始めると新聞で報道されていました。

私が所属する「子育て応援かざぐるま」は1986年に設立され、33周年になりました。全国でも5本の指に入る老舗の団体と言われています。当初は母親の社会活動の際の集団託児からスタートし、1990年代後半に各家庭に向く訪問保育を行なううちに、子育て環境の変化や子育てをしている人の閉塞感や負担感、孤立感を実感して学び直しを行ない、必要と思われる事業を行なって今に至ります。現在は、札幌市中央区の円山で「子育て拠点てんてん」を開設し、週3回の地域子育て支援拠点事

業、自主事業での預かり保育と2歳児の森のようちえんを行なっています。また、2005年から札幌大谷大学短期大学部保育科と連携して子育て支援センターを運営し、訪問保育や産前産後のサポートも行なっています。その他、北海道の人は学びたくでも東京や大阪の研修に出かけるのは難しいので、道内においても皆が参加できる研修会をしてしまおうと、我が団体が主催して支援者対象の養成&スキルアップ連続講座なども開催しています。これまでの活動を通して子育てを取り巻く社会の急激な変化を実感しています。ひろば全協で「アウェイ育児」が72.1%というデータを掲げていますが、札幌市は政令指定都市であるため転勤族が多く、「てんてん」に集う親子は8割5分が全国各地から集まった方々です。最近のひろばでも、「〇〇に転勤が決まった」「転勤が決まったが行き先がまだ決まらない」などの声が出ていますが、転居前に転居先の最寄りのひろば情報をお伝えしています。

「てんてん」には、実家が遠く、マンション暮らしで地域と繋がりにくい親子がたくさん来ています。北海道は半年もの間、雪に閉ざされるので、本州出身で雪の上を歩いたことがないと、自分一人でも歩くのが大変なのに、子連れで出歩くのが不安で引きこもりがちになるという話をよく聞きます。現代の子育ての大変さを実感する中で、孤立した状態では児童虐待はいつでも誰にでも起こり得る可能性がある最重要課題と感じています。

ひろばのこころとして、「みんなで大きくなろう」というメッセージを掲げています。「子どもの育ちを中心にすえて、親も支援者も地域もみんなで一緒に育ち合おう」という意味です。

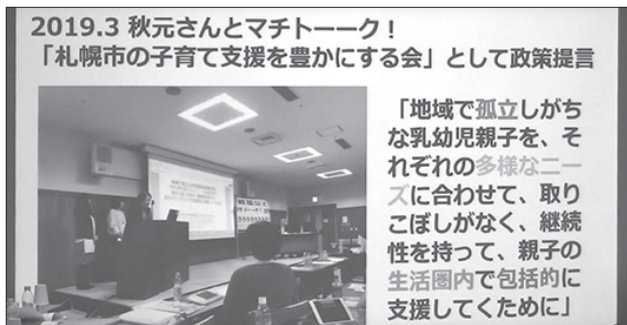
大日向雅美先生の講演で「子育て・家族支援者養成講座」の話が出ましたが、2006年に札幌でも開催され私も受講しました。札幌は協働が進みにくいまちで苦労していましたが、講座認定の際の大日向先生からの講評に、「壁の高さを前に諦めることも、撤退することもしたくはないですね。道は険しく遠いと思いますが、戸は叩き続けたい。明けない夜はない」というメッセージをいただき、それを心の拠り所にその後の活動を続けてきました。

2010年に「子育てひろば全国実践交流セミナー in ほっかいどう」を札幌で開催した際に、私たちのひろばはまだ自主事業でしたが、全国では子育てひろばが中学校区に1つの目標で広がっており、先進的な事例を持ち寄った会となりました。その当時の市長に、他の子育て支援団体とともにセミナーの報告とそこから生まれた政策提言を行なうなどして、少しずつ協働の道が開けました。拠点事業になった後も補助金額は低いままで100万円を持ち出して運営してきましたが、昨年の市長選目前に政策提言の機会があり、全国で相次ぐ虐待事件を受けて予防の視点が大事だと訴えました。提言には、現場で感じるこの他にひろば全協での学びも盛り込んでいます。

提言の中に、札幌市の地域子育て支援拠点事業の開催を週3日から5回に増やし、本当の意味での常設のひろばにしたい、安定して継続的に運営できるように国の基準通りに補助してほしいということも盛り込みました。市の行政も大変さを理解してくれ、2020年度から補助金が国の基準並みに上がり、可能な拠点から週5回開催も行なえることになりました。こうしたタイミングもあり、地域の拠点が本当の意味での親子の居場所となれるようにネットワークを作ったり、お互いの質を向上させ、地域の資源とも連携したいとの思いがあって12月22日の研修交流会に繋がりました。

拠点は支援の入口と出口の両方の役割を担っていますが、札

幌市の利用者支援事業は、市の職員が窓口で行なっていて拠点にはつながりにくいので、「てんてん」では月1回、利用者支援専門員の座談会の場を設けて情報提供をしてもらい、その後、身近な相談につながりやすい仕掛けをしています。



研修交流会の企画は、2019年6月に札幌で2歳のことりちゃんが虐待死した事件が発端でした。接点はありませんでしたが、子育て支援に長く携わってきた者として、もっとできることがあったのではなかったか、どうすればよかったのかと無力感に襲われました。また、2020年度から拠点事業が充実するということで、私たち自身のネットワーク、質の向上を目指しつつ、地域の資源と具体的に繋がりを持つ機会にしたいと考え、私と、拠点を運営する「ねっこぼこのいえ」の小林真弓さん、研修と交流の活動を行なう「さっぽろ子育てネットワーク」の河野和枝さん、かざぐるまの理事も担う、「北海道大学教育学研究院子ども発達臨床研究センター」准教授の川田学さんが企画委員としてプログラムを考えました。

プログラムは2部構成で、第1部では「予防的支援」ということで、札幌市子ども未来局子育て支援課の田村博美課長と企画委員4名で、パネルディスカッションを行ないました。

田村さんからは、地域子育て支援拠点への期待として、地域全体での支援に向けて家庭と地域のハブの役割をしてもらいたいという話がありました。川田先生からは、札幌市と北海道大学共同の子ども生活実態調査の中で、2歳児の保護者の16%が立ち話する相手すらいなという結果が出ていたことが紹介され、ひろばが生活の場で機能すると、困りごとをみなで解決するコミュニティになり得るとの話がありました。

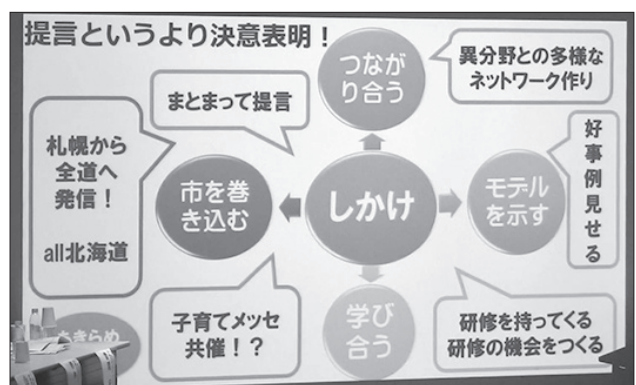
環境設定工夫  
かでの大会議室  
面積306.0㎡

演台	発表者	スクリーン	進行・助演
①利部さん	第1部：様上登壇者席、第2部：登壇者席に私にて特設		松平昇さん
子育て世代包括支援センター	第1部：第2部前半：一般参加者席		ひとり親支援
②武田さん			沼津つとむさん
利用者支援事業	参加者席		DV支援
③岸さん			藤崎やまさん
児童相談所			ファミサポ
家庭児童相談室			ほっとプラザ
④十富さん	⑤船木さん	⑥加藤さん	⑦矢野藤さん
さっぽろこども広場 地域教育相談	小児科医師 産後ケア	こどものくらし支援	産後ケア
		こどもネットワーク事業	産後ケア
		子育てサポートネットワーク	子育てサポートネットワーク

第2部は、拠点が連携すべき地域資源12事業の分散交流会を行ない、①子育て支援地域包括支援センター、②利用者支援事業、③児童相談所・家庭相談室、④さっぽろこども広場、⑤地域教育相談、⑥小児科医師、⑦産後ケア事業および拠点での赤ちゃんふれあい講座、⑧こどものくらしコーディネーター事業、⑨こども緊急サポートネットワーク事業、⑩子育てサポートセンター（ファミサポ）・ほっとプラザ（家事支援）、⑪DV

被害者支援、⑫ひとり親支援の方々に来ていただきましたが、市の担当では課長クラスの方に出席いただきました。最初に5分ずつ各事業の概要を説明してもらい、その後、室内の12ブースで担当者が待ち受け、参加者が内容を聞きたいブースを回るという方法で15分ずつ3回繰り返しました。川田先生が「屋台式」と表現しましたが、自分が聞きたいテーマのブースに行って名刺交換を行ない、直接質疑応答を行なったり、その場でミニ実技講習なども行なわれたりしました。研修会后、実際にDV被害者の支援団体の方が拠点に来てスタッフの勉強会を開催するなど、事業の繋がりも生まれました。

うまくいったこととしては、官民が入り混じって一緒に研修交流会を運営することができたこと。参加者や登壇者からも多数の感想をいただきましたが、反省としては、やりっぱなしで終わってしまった感があること。今後はこれを膨らませて、行政と協力して1日型の子育てメッセのような形で開催できればよいと妄想しています。



最後に決意表明。私たちの役割は、いろいろなところに仕掛けていくことだと実感しました。その仕掛けとは、繋がり合う仕掛け、ネットワークを作る仕掛け、好事例を見せてモデルを示す仕掛け、研修の機会を持ちづらい北海道に研修を持ってくる＆研修の機会をつくる仕掛け、何か行なう際には私たちだけではなく市や道を巻き込むような仕掛けです。

川田先生からおまけとして、「実践者も哲学を求めているのではないか」ということでした。研修会に出ると、今でも親批判がときどき聞かれますが、そこからは何も生まれないでしょう。基本的哲学をしっかり共有しつつ、次の段階に進めたらよいと考えています。



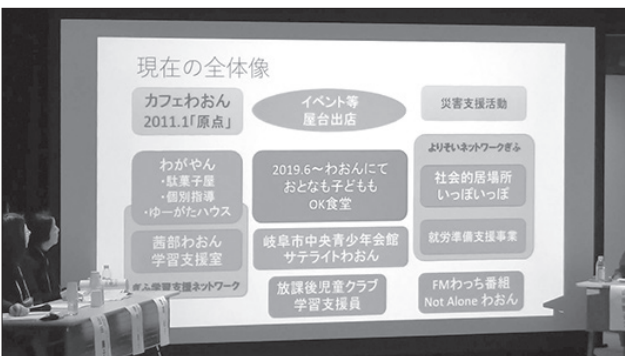
○「おとな子どもも OK 食堂」の現場から

特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長  
杉浦陽之助さん



青木 につぼん子ども・子育て応援団事務局の青木と申します。本日は岐阜県岐阜市からお越しいただきました杉浦陽之助さんをご紹介させていただきます。杉浦さんは特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエアの理事長をしていらっしゃいます。特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエアでは、「おとな子どもも OK 食堂」、食事付き学習支援をはじめ、社会とのつながりを持ってない若者の相談や支援などに取り組んでいます。昨年大垣市で行いました地域人材交流研修会で杉浦さんは、支援の場にこられない子ども、距離や関係性の問題で場に来ることができない子どもがいるということから、家族機能の社会化という視点から移動支援の重要性について訴えていらっしゃいました。それでは杉浦さん、よろしく申し上げます。

杉浦 ご紹介に預かりました特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエアの杉浦と申します。今日はよろしくお申し上げます。岐阜市から東京に来ますと、もうそれだけで、ビビってしまうんです。それだけ田舎で何かをやっているということになるんだなということになるんですけれども、田舎なりのいろんな課題がありますので、そこをも含めてお話をさせていただきます。



うちの法人の現在の全体像ということで、(スライドの)左上に「カフェわおん」と書いてあります。法人が出来上がったのが2011年。2011年1月17日に設立する直前、喫茶店を一つ手に入れて、活動を始めました。1番の目的としては、子育てというよりは若者を中心とした市民の孤立を考えていくNPOと

して活動を始めたんですね。というのも、私が自分で法人を立ち上げる前に勤めていたNPOが、ずっと若者支援を行っていたからです。そこでいわゆるニート状態の若者を100人程度、合宿型の自立訓練みたいなことを行って行く中で、いろいろと感じるところがありまして、自分なりのことが出来ればいいなと思い、カフェを手に入れ、これを拠点にしてやっという活動を始めました。

その年の3月に法人になりました。自分の思いだけで法人を作ったので、周りに課題を抱えている人がたくさんいて、それに対して「なんとかしなきゃ」という動きとはちょっと違うんですね。そういうことがあるだろうという前提で動き出した。という中で、2011年といえば東日本大震災が発生しました。自分もいろいろと、これはもう震災後のいわゆる孤立状態、震災から少し時間がたって来ると精神的な部分も含めて、孤立を感じる人がいるんじゃないかなと思ひ、現地に行くことも考えなきゃなということで、動き出したりしています。途中で石巻焼きそばを焼いている人に出会って、その方の支援をする。自分自身もカフェをやっているところから、出張してイベントを開催して、私たちが石巻焼きそばを作って応援するようなご縁があって、現在はそこを皮切りに、災害被災地へ炊き出しに行くようになりました。今も、長野市に10回ほど炊き出しに向かっています。そのときに若者も一緒に行かせるということで、支援の一環にしていこうと取り組んでいます。

子どもに関することを中心にお話をしますと、(スライドの)左側の方に「わがやん」と書いてあります。正式名は長くて「わがやん わおん」と言います。これは民家を2016年の夏前くらいに、「空いているんで貸したいんだけど、誰かいないか?」ということで借りました。小学校の目の前にあったので、まずは子どもたちとの接点をどう作るかなということを考えて、駄菓子屋さんをやって、その奥の部屋を使って、「個別指導」や食事を提供する形の学習支援「ゆーがたハウス」を始めました。週に月・水・金の3日間、今は子どもが毎回8名ほど、夕食をとりながらやっています。これらは独自にやっているのではなく、下に小さく「ぎふ学習支援ネットワーク」とありますが、全部で8会場、岐阜市にありまして、そのうちの2会場をうちが担当させてもらっています。下の西部わおん学習支援室は週1回で、食事を出さない学習支援を公民館を借りてやっています。

その他、右手には「社会的居場所いっぱいぽぽ」、就労支援事業とありますが、これらは生活困窮している成人の方々への支援として岐阜市から受けています。これも「よりよいネットワークぎふ」といって、一般社団法人を立てて、その一員としてやっています。

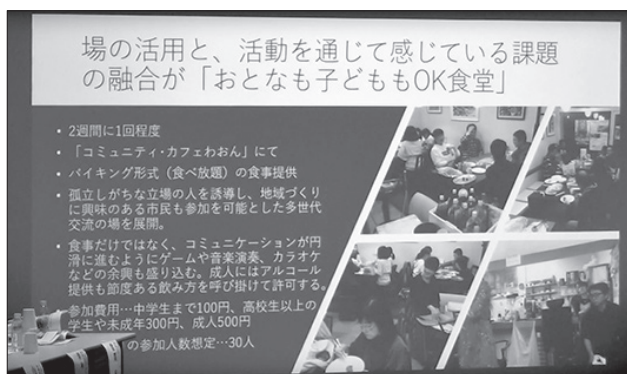
(真ん中の岐阜市中央青少年会館で行なっている) サテライトわおんは若者と一緒に音楽を楽しむ活動で、言葉による支援ばかりでは良くないかなと、一緒に活動することで立場を超えて楽しめることを提供しようという格好でやっています。あとは岐阜市で委託を受けてやっている放課後児童クラブの学習支援の仕事と、週1回コミュニティFMで番組を持たせてもらって、自分の活動の発信をしています。

前置きはこんな感じなんですが、その中で今取り組んでおります「おとな子どもも OK 食堂」について。

レジュメの中の「過去の取り組み…高齢者」のページをご覧ください。法人を立てた翌年に岐阜県地域づくり支援事業を委託で受けまして、いわゆる貧困層の支援住宅団地で、かれこれ50年近く前に建てられた市営住宅団地。ほぼ高齢者だけが残っ



ている団地で、高齢化や福祉の問題があり、そこで見守りの活動などをやって行く必要があるだろうと、私のほうからも提案をした。その取り組みを進めるうえで若者の手を入れて行くことで、若者たちにも役割意識を持って、自立に繋げる活動ができるんじゃないかと、この地域に入っていったんですね。それが2013年に「山手サロン」の立ち上げに繋がって、成果報告会のチラシには、若者たちがお弁当を作ってサロンで一緒に食べている写真も掲載しています。そのときのリーダーだった70代の女性が、7年近く経った今では80代となり、なかなか自分たちでは動くのがしんどくなってきている現状があります。そのサロンをやっていて思ったことは、高齢独居男性はコミュニケーションを取らない傾向にあるのかな。実際高齢の方々を対象にした統計を調べてみると、一人暮らしの高齢男性がコミュニケーションをとる頻度、会話が少なくということが見受けられて、高齢の孤独死の7割は男性というデータが内閣府から2009年に発表されていました。



団地での繋がりとということ、高齢の方々に対する視点と、現在活動している子どもへの取り組み。貧困ということが強く意識にあるかといえば、どちらかといえば孤独、孤立に注目して行きたいなと思っています。というのは、若者たちを見ていると、子ども時代の何かの影響が自立への繋がらなさ、もしかしたらあるのかもしれない。(自立への繋がらなさは)貧困だけ(が原因)ではないだろうと感じておまして、今、子どもたちのことにも関わっています。孤立の影響というのは、説明するまでもなく、みなさまよくご存知だと思います。いろんな精神的な部分で影響を受けたりすることがあると言われてます。2019年の5月に無差別殺傷事件(50代の犯人は自殺。世間と断絶した生活をしてたとみられている)が起き、一方で、(80歳の親と引きこもりの50代の子どもが地域で孤立した状態で同居するなどの)いわゆる8050問題が増えてきている現状もあります。

これらの流れの中で、現在取り組んでいる子どもたちの件も含めて、もうちょっと自分たちでできることはないのかと、模索していききました。

学習支援の中で、(スライドに)食事をしている場面があります。これは別に子どもに限定していたわけではないんですけども、学習支援をやっているところで食事をしていたので、ご近所の高齢女性が月2回きてくれていたんですが、途切れてしまいました。くつろぎや癒しを求める場合に、(幅広い年齢層対象では)対応が難しいのかなと感じました。

一方で、喫茶店があまり活用されていないんじゃないか。でも認知は結構されているんですね。年末、大晦日に知り合いの製麺屋さんから、「800食の年越しそばがあぶれちゃった。なんとかしてくれ」ということで、喫茶店で200食ぐらいを無料

で振る舞ったりとか。そんなことをやりながら地域の中での認知度を上げていくということをしながら、考えていきました。

場の活用と活動を通じて、つながりはできていても、単なる居場所みたいにして和気藹々と過ごす時間も設けられたらいいなとか、そうしたことから利用者からポロリと出てくる課題を拾い上げられたらいいなと思い、「おとな子どももOK食堂」という名前の取り組みを始めることになりました。

名前が先行して浮かんできたというのが正直なところ。以前から地域食堂という表現でいえば全国的にも似たような取り組みがあるとは思いますが、それをもっと入りやすい雰囲気にするには、名前を聞いた瞬間に行きやすそうだと受け止められるといいなと思って、ずっと考えていたんですね。「みんなの食堂」とかあるけどなあと思ってたんですけども、おとなも来れるし、子どもも来れるし、おとなの「O」と子どもの「K」で「OK」かなと思って、ガッツ石松さんの顔が浮かんで、これでいいかな、みんなに伝わりやすいかなと、やり始めました。

小さな喫茶店なので、座れる席は20席程度。夕方5時から10時までの5時間だけ開けますという風にして、早く帰られる方や、遅く来られる方がいて、うまく循環出ています。バイキング形式で、いつもだいたい8品目くらいそろえて、食べただけ食べられる。屋台を出すときにも、中に鉄板を持ち込んで焼きそばを32人前、ガンガン作ったりして、楽しくやっています。最近はYouTubeでカラオケの音なんかありますので、そういうのを引っ張ってきて、歌を歌ったりしております。一応有料でやっているんですが、毎回の利用人数の想定も、30人ぐらいがご飯を作れる限界かなと思っています。

開始前の意識は、孤立しがちな立場の人たちの定期的かつ継続性のある見守り活動のひとつの方法になり得ないかなと。人と人とが顔を合わせて会話をしたり遊んだり、食事したりするような、時間と経験の共有の場を設けていけたらな。そういうつもりで始めたんですね。やはり孤立しがちなところという、このスライドの下にもあるように、「社会関係資本」という言葉、人とのつながりであったり、つながりを結ぶコミュニケーションの取り方とかいう部分で、なかなか場がなかったりしている。そういうことでつながりが広がっていかないということがある。つながりが広がっていく場になるといいなということ、さっきの孤食の子どもたちに安心して食事を提供できるようなこと、これが、大きく言えば「家族機能の社会化」ということにつながるのかなと。

先ほど北海道の方がおっしゃっていた子育ての現状のスライドにも書いてありましたけれど、ワンオペの子育てというのも昨今多い。実は僕はまだ52歳なんですけれど、孫が生まれまして。4カ月くらいで、非常に可愛いんですけども、自分の娘が育てている姿を見ると、大変だなということは感じます。でも、僕らぐらいの世代が(乳児を)「よしよし」ってやってる、楽しく、可愛いだけで済んでいくようなところから、母親には休憩してもらおうというのもいいかな。基調講演で大日向先生のお話にもあった(シニア世代の子育て・支援の)取り組みも、僕の中でも重要なことだと思います。

現状では2週間に1回のペースでやってきて、現在17回。この資料を作った時でいうと15回。ほとんど毎回30名以上の参加を得ています。子どものみの参加が毎回4~6名。これは「ゆーがたハウス」にきている子どもたちで、「この日は勉強の話は一切しないからね」ということで、おとなと一緒に歌ったりして、楽しく過ごしてくれています。親子での参加は、だ

いたい母子の参加が多いんですけれども、常連1組は毎回参加してくれます。60歳以上の参加は、先ほど高齢男性の話をしましたけれども、なかなか動きづらいようで、ここは課題として残っております。無業者、生活保護、障害者雇用というところも動いてまして、スタッフも含め毎回約10名。僕の手伝いをしてもらっている2人のように、生活保護を受けていて、障害者手帳も持っているというようなメンバーがやっています。いつも楽しそうにやってくれています。彼らは滞在時間が長い傾向にあり、5時間ずっといるという人もいます。

子どもに対することもお話ししておきます。子どもたちは、おとなたちに見守られつつ安心して過ごしていることは、今見ても感じます。20時回っても、なかなか帰りたがらないところからも、そうかなと。保護者から見たときにも、みんな楽しく過ごして、楽しそうに帰ってくるということで、有り難がられている。そして、この二つだけでも保護者の懸念が少し軽減されているような気がします。さらに広げていくためには、子どもたちはかなり常連化してまして、現状孤食の子どもたちがもっともっといるはずなんですけど、つながりにくいという要素があります。来る時間はいいんですが、帰る時間になるとどうしても暗くて、子どもたちだけで帰るのはなかなか大変な状況があるので、今参加してくれているメンバーが送っていく、ボランティア化といったことも、移動支援。こんなことも、手助けとしてちゃんと機能していくんじゃないかとも思っています。あとは来る段階のところ、放課後児童クラブもありますので、学校との連携も考えて、やっていけるといいかなという風に思っております。

いろんな取り組みの中で子どもに対することなんですけれども、象徴的なことで1件お話しします。OK食堂ではないんですが、高校3年生の母子世帯のお子さんがずっと「ゆーがたハウス」に来てまして、勉強は僕、教えられないんですけれども、毎回来ています。夜9時40分くらいに一緒にご飯を食べています。彼は父親の存在は知らないんです。彼といつもご飯を食べながら、会話をするということが、僕にとっては、その先の家族機能、僕自身は父親になろうとは思いませんが、相手はどういう風を感じているのかなと思いつつ、一緒に食べています。会話を楽しみながら受験を迎えることを応援することができている。こういうことも地域には必要かなと感じながらやらせていただいております。

以上です。(拍手)

青木 杉浦さん、ありがとうございました。続きまして、當間さんお願いします。

## ○市民発 ごちゃませ 真剣 まるごとケア

### みやの森カフェ 一般社団法人Ponteとやま副理事長 加藤愛理子さん



當間 事務局の當間と申します。富山県といえば、地域福祉に関わる方にはおなじみの「富山型デイサービス」というのがあります。今回、2年前に金沢でおじゃました日常生活支援サポートハウスの山本実千代さんに「富山に行きたいのだけれど」と言ったら「砺波にすごくいい場所があるから紹介します」と言われてPonteとやまの加藤さんを紹介していただいたのですが、残念ながら富山型デイサービスのネットワークにはまだ入っていらっしやらない。ちょうど設立して5年が経って、5周年フォーラムがあるからということで、いきなりヒアリングに行くことになりました。とっても素敵な場所を運営なさっているのですけれども、そういった詳しいことは加藤さんから直接伺っていただいたほうが良いと思います。ごちゃませっていうのを非常に真剣に取り組んでいるのが加藤さんたちかなというのがあります。ごちゃませって、すごく緩やかで何となくやっていると思われたりするのかもしれませんが、ごちゃませにはごちゃませをやるなりの覚悟と真剣さと、実は高い専門性を求められているのだ、と言ってしまったら、ごちゃませをやりたいなくなるのかもしれませんが。さて実際どうやっていらっしやるのか、加藤さん、よろしくお願いします。

加藤 こんにちは。富山県の砺波市からやってきました。今まで入ってないと言われたのですけれども、富山型のデイには入りません。私たちは狭間の組織……、組織ではないので、これから入ることはないと思いますが、その話も含めてさせていただこうと思います。

私たちはPonteとやまという社団法人を作って「みやの森カフェ」を運営しています。(写真を示し)これがカフェです。私の自宅の庭で、砺波市この辺地価が安くて、坪1万円みたいなところ。土地だけは200坪あるので、その中で小さな終の棲家と、小さなカフェを作りました。これが砺波市の地図なのですが、真ん中に庄川というのがあって、西側にイオンや住宅地があったりして、混んでいるのですけれども、東側は閑散としています。風光明媚でもなく、非常に中途半端な区域なのですが、私は東側に住処とコミュニティカフェを建てたのです。一つの理由は、私の友人がここで富山型デイサービスをやっていた。そしてそこに、ものがたり診療所という在宅医療の診療所がある。それを住民の方が招致したという話を聞いて、福祉と医療と、住民の人の危機感があるとしたら、ここにコミュニティ

カフェを作ったらどうなるかなあという興味で人生を賭けました。

二人で社団法人を作りました。NPOはとても大変なので。肩書は副理事長と書いてありましたけれど、二人でやっています。相棒は水野カオルという人で、私より9歳年下。21年間教員をやってきましたが、どうも学校の中だけでは課題が解決されないのではないかということから教員を辞めたのです。私の方は実は転勤族で17回目の引っ越しで富山にたどり着きました。それが26年前。富山にきて次の年、私は富山YMCAというフリースクールの国語を教える講師になりました。ここで、不登校とか高校を中退した若者たちと一緒にいろいろ学ぶことになりました。



そして、私たちの共通点、水野さんと私の共通点は実は「きょうだい児」というものなのです。お聞きになったことはあるでしょうか？障がいのある兄弟がいる人のことをきょうだい児というのですが、水野さんのお姉さん、私は、妹に障がいがあります。きょうだい児の特徴が実はありまして、へそ曲がりなのです。なんでかなと思うのですけれど、まず、みんなきょうだい児でまとめられるのは嫌なのです。でも「へそ曲がりだね」というと、嬉しそうにニヤッと笑う。私たちの活動には、結構きょうだい児がおりまして、今日も赤いストールを巻いてきているのですが、これもきょうだい児であるなっちゃんが作ってくれたのです。

おそらく、小さいときからの経験が積み重なってへそ曲がりになっていると思うのです。兄弟にもときどき支援が降りかかるのです。「あなた大変よねえ」とか同情も寄せられるし、褒められるし、何にもしてなくても「お姉ちゃんなの。偉いわね」とか。

それを子どもながらに斜めに見ているという状況で、へそ曲がりを作られていくのではないかと思います。結果、私と水野さんの中には、困っている人を助けてあげるといった感覚は全くないですね。まあ助けてはあげられないけど、何もできないとは思いますが、何とか一緒に生きられればいいなあくらいのスタンスなので。そんな中でも、何か面白いことやっていこうかなという感じなので、とても気は楽に、二人でスタートしました。(写真を見ながら)これが彼女と私の写真です。私は、ご飯食べない人にご飯食べさせるのが、かなり趣味のような。野菜は食べてほしいですね。実はフリースクールで国語を教えた時も、国語だけではなく、弁当持って子どもたちと一緒に食べていたのです。それがフリースクールでもカフェを始めるきっかけになったのですが、(写真を見ながら)今、頑張っ、こんなランチを出しています。つい最近100円値上げして800円になりました。お金のない人も来るので、「しんど



いなあランチください」という合言葉で、懐と胃袋がしんどい人は「しんどいなあランチ」が500円で食べられる。更に皿洗いすると100円引く。午前午後手伝わたら無料で食べられるという変なシステムを作っています。

私たちのところは結構子どもたちが来るのですね。(写真を見ながら)左側に居るのが発達に凸凹のある子どもたちで、月に1回くらい凸凹キッズカフェというのをやって、子どもたちがチラシを作って、お客さんも山ほど来てくれました。最初、子どもたちにはお金の金額を書いた券を渡したのですが、子どもたちが「券じゃ嫌だ。現金をくれ」というので、そのときは子どもたちに300円戻して、さらにお客さんが沢山来たときには、「今日はお客さんが沢山来たからね」と割増料金を上げると、本当にね子どもたち、良く働くようになります。

右側の方は、週1で学校に行っていない小中学生たちがスタッフとして来ています。非常に優秀です。カフェラテのアートとかをやってくれます。

私なんか完全によそ者ですからね。近所の方たちも、よそ者の人間がカフェを始めたって言って、「わけのわからんものできたな」と思ったと思うのですが、みなさん優しく、お野菜をくれたり、竹を山から切ってきてくれたりして、流しそうめんをやりました。

(スライドの写真を説明)右側は園芸療法の人たちに関わってもらっていて、子どもたちと畑をしたり、それを収穫したり、ご飯を食べたりしています。

他にも介護しゃべり会をやったり、それから唯一、市からもらっている助成金が認知症カフェだけなのですが、認知症カフェをやっているのですが、認知症の人が来ているのかは実はよく分からなくて、ごちゃまぜになっています。市はそれでいいと言ってくれているので、非常にありがたいです。

(写真を見ながら)これは夕飯会をやるうと言ったら集まってきた人たちで、ダンサーはいる、絵描きはいる、NPOの理事長もいる、高校休学中の苦しい若者はいる、ママもいる。わけのわからない、ごちゃまぜな感じで、みんなでご飯を食べました。

この髭の男の人は私の父93歳です。女性は富山型デイサービスの、富山の3大魔女といわれている宮袋季美さんですが、父は私の終の棲家の半分の出資者なのです。「お父さん、老人ホームに入らなくていいよ。ここに居ればみんな助けてくれるから」と言って出資を半分してもらって。ま、いい思いしています。こうやってハグしてもらったりして。



ここから、カフェに寄せられる相談なのですが、最初は実はケアラーズ・カフェということで、介護している人に使ってもらったらいいなという想いでやったのですが、私たちの前職が教育関係だったので、子どもと若者の相談が90%以上です。

その中で発達障害の若者たちの相談がとても多い。よく話を聞いていくと、そこにDVがあったりすることもよくあります。

最初から、ごちゃまぜを目指していたわけではないのですが、自然にごちゃまぜになってきました。赤ちゃんから高齢者までいろんな人たちがご飯を食べたり、おしゃべりをしたりしています。「ごちゃまぜ」ってどういうことかっていうと、支援する人とされる人の区別が無くなっていく。私のところは、相談に来ると相談室がないので、オープンなカフェの中で相談が始まって、「実はうちの息子が……」という話が始まると、相席した人が「ああ、私もなのよ」ということがよく起きる。私のほうも、あの人と一緒にだ!と思ったら「ちょっと、ちょっと」って呼んで「ちょっと一緒に話を聞いてくれる?」という感じになっていて、相談というよりも相談がスタートで仲間ができていく、というほうが合っているのかな、という気がします。

## 「ごちゃまぜ」ってどういうこと

- 支援する人、される人の区別がない
- 困りごとが多様
- 共通しているのは生きづらさだけ
- 比べ合わない場所
- 日常生活がここにある
- 自分ができることをさがすところ

ある人は、子どもの相談に来た二人がとて似ているので、一緒に話したらいいよと話をしたら、意気投合して、話しているうちに「これは子どものことじゃなくて、私たちの生き方の問題なのだ」っていうことが分かって、「そうだ、私たちは自分らしく生きよう。もう旦那とは同じ墓に入りたくない」と二人で納骨堂を探して歩いているそうです。

というようなことも、ときどき起きますが、困りごとが多様だと、うちの方がましだわとか、あっちの方がましだわとかいう比べ合いが起きずに、お互いに支え合うことができているような気がします。困りごとが違うだけに、自分の力が発揮できる場面というのが結構あります。

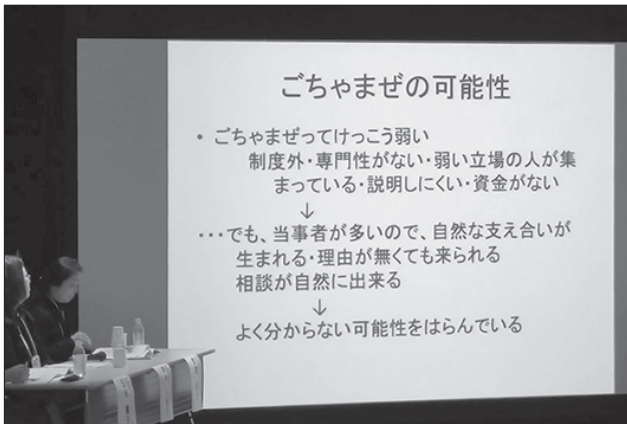
こんなことを5年半くらい続けているのですが、私のカフェは悩み相談と謳っているんですけど、独りぼっちではない、ということ。それから悩んでいるのは自分一人ではないということからスタートして、それから自分に役割があるということが分かって、自分がやりたいと思ったらやってみようよ、という応援はしています。特に若い子たちはいろいろな生き方があるのが分かって、そこから自分らしい生き方を探していくことができるような気がしています。

私は活動を始めて3年目くらいに、だんだんうちのカフェがごちゃまぜになってきて、混沌になってきて、このままでいいのだろうかという悩みを持ったときに、「ごちゃまぜ カフェ」で検索したら、長野県にある「ごちゃまぜカフェ」というのがヒットしたのです。そこにも本当にいろんな人が来ているということが分かりました。そうすると、うちと同じようなことが全国であるのではないかと、富山県内にもあるのではないかと元々感じていたのですが、ごちゃまぜの可能性をちょっと考えてみました。

でも最初あまりよいことが思いつかなくて。「ごちゃまぜ」ってあまり通じない。弱い。なぜかという制度にどうしてもは



まらないのですね。子ども食堂って言ったらすぐお金が入る。高齢者支援って言ったらお金が出てくる。子どもと高齢者とそれ以外の人もいるとなると、どこからもお金が出てこない。(分野をまたがった取り組みになると) 既存の制度外。専門性があるようには見えない。じゃあ、ここから「ここから前向きに生きましょう」なんていうこともちょっと言えない。



今日は頑張っって説明していますけれど、本当に説明しにくいんです。一番大きいのは資金がない。ただ、当事者の人、自分が当事者であるという意識の人が集まってくると、本当に自然な支え合い、支援者ではなくて当事者の人たちが、病気になったりとか、必ずみんな何かの当事者になっているんだけど、自分が当事者であるという意識を持つ人が集まると、とてもいい支え合いができてきます。私も当事者です、きょうだい児でもあるし、肺がんをやったこともある。

そうするとなんかよく分からないけれども、ごちゃまぜには可能性があるんじゃないかなあということを感じるようになっていきます。ここ(長野県千曲市)の「ごちゃまぜカフェ」何回かおじゃまをしました。

資金のない私たちですが、人を巻き込むのは非常に得意です。(写真 みやの森通信) これも今日来ています家森さん、フリーペーパーの編集長なのですが、家森さんは私たちに「Ponteとやまは若者の支援はしてくれるのですけれども、僕たち40代の支援はしてくれないのですね」って言われたので、「いえいえ、私たちは支援をするのではなくて、支援をしてもら立場なのですよ。家森さん私たちを支援してください。今、一番できていないのは発信なのです。あなたはきっとフリーペーパーの才能があるからやってください」と言ったら、こんなに立派なフリーペーパーを。本人もあまり自信が無いので、まずは3カ月やってみようというところから始めて、今、2号出たところです。

今日は、創刊準備号(をお配りしています)。家森さんが欲しいのはみなさんの感想なのです。感想を書いて送ってくれたらみやの森カフェのスイーツプレゼントというのもやっているのですが、まだあまり……これから頑張ろうという。

今年の抱負です。実は富山県は非常に面白い場所がいろいろあります。特に若者たちが頑張ってくれています。皆さんもお聞きになったかもしれませんが、高岡市の「ひとのま」という。30代の若者がやっている居場所があるのですけれど。家を1軒用意して「誰が来てもいいですよ」としたら、市からホームレスの人とか、刑務所から出た人とかも紹介されるらしくて。元々、子どもたちも集まっているので、子どもたちと一緒にホームレスの人とか、刑務所から出た人がご飯食べている。特に冬

はホームレスの人がそこに泊まって、去年はとうとう暖房費がなくなって、とても大変だったと聞いて、私のほうで賛助会員制度を作って「はい、みなさん。寄付してください」と言ったらお金が沢山集まった。

それから、もう一つは「ガチョック」という障害者就労支援B型の作業所と居場所を提供している団体。これも若者3人でやっているのですが、なんでもB型作業所で軽作業ではなく、YouTuberを育てている。結構そっちは儲かっているのですが、それは利用者にお金が行くので、スタッフの方にはお金が行かない。不思議な居場所をやっております。あと、古本屋さんで辛いことを言ったら100円引くという。共通するのはお金がない。

私たちはランチも出しているし、学習サポートという事業もしているので、どちらかというと私たちが一番優雅かなあという。そろそろこの混沌と弱い力を結集して、もうちょっと形のあるものにして、発信していきたいと思っています。まずは、富山県内からやっていこうかなと思っていますが、それは数を把握しろとか、一番苦手なことを言われていますが、それをやってみようかな。それからまだまだ必要なことは見えてきて、やれていないことはいっぱいあるのですけれども、人を巻き込んでやっていこうと。



最後に、昨年4月に本を出しました。共著で南雲明彦さんと一緒に書いたのですが、彼は今、講演者として全国を回っています。いろいろな居場所を見て、うちのカフェのごちゃまぜを見て、ごちゃまぜの可能性に賭けてくれて、本を出そうと言ってくれたので、4月にこの本が出ました。読んで分かるかと言ったら、余計分からなくなったという感想も寄せられていますが、Amazonで買えますので是非読んでいただけたらと思います。

私たちは、どちらかという大きなことをしていくよりも、誰もができることをしていきたいなと思っていて、私はたまたま土地が安かったのでカフェを開きましたが、家をちょっと開けるとか、自分の住まいをちょっと外に開くとか、地域で空いている家を使うとか、誰でもできる地域活動ってあると思うのです。それは大きくなくて構わないと思うので、そんなことが増えていったらいいと思います。

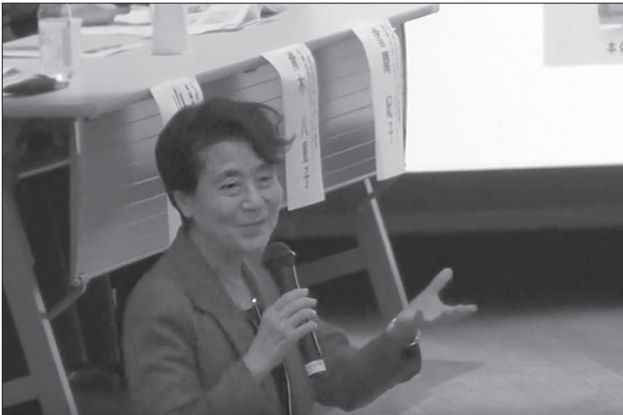
ご清聴ありがとうございました。

## コメントと質疑応答

當間 ここで、大日向先生から、お三方のお話に対してのコメントをまとめてお願いします。

大日向 どうもありがとうございました。とても貴重なお話を楽しくお聞きしました。

今、日本全体でNPOは雨後の筍みたいにいっぱい生まれていて、その何割かは残念なことに消えて行っています。その中で、この三つの団体はキラキラ光るものとして、応援団のみなさまはヒアリングしながらピックアップなさったんだろうと思います。確かにその通りだなと思いつつお話を聞いておりました。



お話を聞きながら、三つの活動に共通していることとして、ノーベル医学賞受賞者の山中伸弥さんの言葉を思いました。山中さんはお若いときは研究成果が上がりなくて、受け入れてくれる研究場所もなく、大変苦労なされた。その中で彼を唯一受け入れてくれたアメリカの研究所の所長さんが当時の山中さんに贈ってくれた言葉を、彼はずっと金字塔のように大事にしてきた。「人生間違えないために、そして研究を成功に導くための秘訣はVWだ」と。「V」は「Vision」、「W」は「Work hard」です。お三方はとてもユーモラスに語っていらっしゃったけれど、やはり活動は「Work hard」だと思います。一見緩そうに、楽しそうにしなければ、みんな寄って来てくれません。だから楽しそうに、水の上を泳いでいるようにするけど、水面下は足であぐらのようなことがいっぱいある。行政と協働できたかなと思うと、行政が悪代官みたいに変身してしまったりね。(会場笑い) 補助金をいただくということは、こんなにも大変なことなんでしょうかとやっている所が大半です。「Work hard」です。今、ワーク・ライフ・バランスとか、人間らしい働き方が推奨されています。もちろん、それは大事です。でも、一つのものを作っていく、そのプロセスには、必死に頑張らなくてはならないものがある。お三方は、それをきちんとなさった団体。しかし、山中さんはこうも言っています。「がむしゃらにWork hardではダメだ。しっかりとVisionを持つことだ」。お三方、それぞれ掲げたVisionが、しっかりと地域の方々に共感を持っていただけて、今なお続いている。「VW」を見事に体現されたと思います。同時に、仲間を勝ち取られました。ともに戦う仲間。どんな試練があっても信じ合ってくれる人がいてこそ、NPO。

そして最後に申し上げることは、ニーズは掴むだけではダメ。最初は親子、住民の声に愚直なまでに耳を傾け、そこから何を求めているかを掴もうとする。でも、いつかそれは新しいものを創っていく。新たなものを創るビジョンも打ち出されている。お三方はただ、住民のみなさんの声に応えただけではないと思

います。みなさんの豊かな人生経験、喜びも苦しみもあって、そこから半歩先のものをクリエイティブされている。そのところに、中身は違っても、共感すること、学ばされることがたくさんありました。ありがとうございました。(拍手)

當間 大日向先生、どうもありがとうございました。

ここからは質疑応答ということで、フロアのみなさまからご質問をお受けしたいと思います。基調講演から報告と提言まで、これまでの内容すべてに対するご質問をお受けします。どなたか。

もう少し(お三方のお話を)聞いてみたい?では、(報告と提言の)お三方にさらにお尋ねしてみましょうか。昨年の報告会では、あらかじめお題をお伝えして発表をお願いしていたのですが、質疑応答だけで時間がなくなってしまいました。

児童虐待を防ぐとか、早くに見つけて対応するために、自分たち、地域で出来ることってなんでしょうか。

山田(智) いつも心がけていることにはなりますが、地域の親子にとって敷居の低い、第二の実家のような身近な居場所を作ること。そのためには親子と水平対等な関係を築き、本当の意味での心の拠り所となること。それを、お互いの学び合いを通して市内や道内の他団体の支援者とも共有していくこと。もちろん私たちだけでは足りないことは重々わかっているのですが、地域の様々な専門機関や団体の方たちとも繋がり、顔の見える関係をしっかりと作っていくこと。言葉の上だけでの連携でなく、血の通った、必要な時にちゃんと繋がるための具体的な連携を一つひとつ丁寧に作っていくことだと思います。今日、報告した研修交流会の内容を日々実践することで、親子の孤立を少しでも防いでいきたいです。

當間 ありがとうございます。

先ほどの報告にもあった、札幌市での屋台型・分散型交流会では、担当の人と直に話をして、例えばDVのところでは、自分が悩んでいるという方がいらしていたり、ひとり親のところにも当事者がいらしていたり、保育を利用して参加した人が子育て支援の専門家だったり。こういう場を続けていくこといいんじゃないかなと思いました。

次は杉浦さん、お願いします。

杉浦 僕はあまり直球で母親というか親世代の支援ということにはしていませんが、子どもたちが話していたりとかで、ときどき見え隠れすることがあります。なかなか入り込めないと思う要素もあり、こちらから入り込んでいくことがなかなか難しい中で、早い段階で相談しやすい世の中というか、孤立しないでほしいというメッセージを出し続ける活動を、直球ではないけれども、して行きたいという意識は持っています。全て防げるとは思っていないですが、関わりを持てるチャンネルを少しでも増やしていくことかなとは思っています。

當間 場所を持っていらっしゃるということは、なかなか有利だと思うんですね。「あそこに行けば、なんとかなる」というか。ただ、そこまで行き着くまでに電車賃がないとか、暗くて嫌とか、あるかもしれないけれど、「あそこに行けば、なんとかなる」とひらめいてもらえれば。





加藤 そうです。

當間 一応一通りお聞きしました。

あ、質問がおりますか？ どうぞ。

大日向 加藤さんにお伺いしたいんですけど、一本釣りするって、本当にそうだなあと思って。行政の縦割りを崩せっていても、無理なんですよね。縦割りに横串を刺していくのが、NPO だということはよく言われていて、なるほどと思ったけれど、どういうふうに刺していかわからない。一本釣りするんですね？

加藤 そうです。(会場笑い)

大日向 一本釣りした人が、かえって組織の中で動きにくくなってということではなくて、ちゃんと動いてくれるんでしょうか？

加藤 その点は、動きやすいように心がけるといって、おだてていく。今年から民生委員児童委員もやらされることになって、始めてまだ1カ月なんですけど、今まであんまり繋がりのなかった社会福祉協議会(社協)とすごく繋がるようになって、なんでもやるもんだなと思っています。もちろんこちらも、あちらの働きを認めると、向こうが動きやすくなってくれることがわかったので、おだててやっていきたい。

大日向 もう一つ、先ほど時間がなくて言わなかったけれど、「市民発 ごちゃまぜ 真剣 まるごと」、これは本当に地域のキーワード全部なんで、すごいキーワード、素晴らしいことだと思いました。多様化ってよく言いますが、多様化というのは逆に傷つきますよね。そのところをどういうふう乗り越えていくのかというのも課題ですよと申し上げたいと思っていたら、先ほど加藤さんがおっしゃってくださって、「ごちゃまぜは大変だ」って。



加藤 大変ですけど、面白いです。

大日向 そうですか。ありがとうございました。

奥山 あ、質問が上がってきました。

家森 一般社団法人 Ponte とやまの「みやの森通信」を作っている家森と申します。今日は貴重なお話をありがとうございました。大日向先生に質問をします。Ponte とやまの今年の抱負の中に「居場所の数を把握したい」という項目がありましたが、アウトプットに向けたインプットのやり方、データの集め方に

杉浦 そうですね。子ども自身が行動できるなら、うちに飛び込んで来てくれるとかね。そういうことができそうな場所であるということは、意識して行きたいですね。だから駄菓子屋は、そういう意識でやっていることです。

當間 ありがとうございます。

加藤さんはいかがでしょう。子育ての相談がとても多いとお聞きしています。

加藤 そうですね。複合的なんです。虐待が起きているときというのは、例えば、お母さんがDVを受けているというときには、子どもだけに注目するんじゃなくて、お母さんは今どういう状態でここへ来ているかということも大事だなと思っていて。まず子どもさんが一人でうちへ相談に来るということは考えられないので、お母さんからそういう相談を受けたときに、子どもはどのような状態なのかということを見極めることが大事なこと。私たちは独自でやっているわけではなくて、本当に弱小ですから、いろいろなところと繋がっていて、私たちのネットワークづくりは団体と団体ではなくて、ある意味一本釣りしていくんですよ。行政でも、子どものことをなんとか救おうとして繋がれば、以降そこと繋がっていく。福祉課と繋がっていますといっても、なかなかそこと繋がりが切れないんですね。福祉課のなんとかさんだったら、即(動ける)。砺波市とはだいぶそれが出来るようになってきた。何かあって連絡すれば、すぐに動いて地域包括支援センターなどがなんとかしてくれるというのをありがたく思っています。

それから、先週、種部恭子さんという富山県議会議員であり産婦人科医の勉強会をみやの森カフェで行いました。そのときに、自分がDVをされている自覚がないという女の人が多いと聞きました。(暴力を振るわれたりするの)自分が悪いと思ってしまう。その辺の啓発活動もやっていきたいなと思っています。それから富山でSNSでの相談窓口ができたんです。種部先生の話の中で、「家出したい」と発信すると、泊め男というのが発生して「うちに来るといいよ」と呼びかける。これが一番危険。泊め男が発信する前に、こちらでストップをかけることが重要。「(家出したいと発信する)子どもを泊めるところを作るのよ」と、種部先生に発破をかけられました。また何かが始まりそうで、本当に大日向先生がおっしゃる通りで、忙しいです。そろそろ老後をと思っているのに、いろいろ次から次へとあって。(会場笑い)

當間 ありがとうございます。案外、知らないうちにいろいろなものを呼び寄せているとか。

相当な工夫が必要だと思っています。大日向先生のお話に出てきたバックオフィスのなかで、役に立ちそうな事例があれば教えてください。よろしく願います。



大日向 難しい質問ですね。答えにくいんですが、私のやっている活動はデータ分析ではなかなか出ないものから始まっているんです。バックオフィスでも（担当する事柄やそれに対するスキルなどは）一人一人全部違います。例えば、講演会での企画進行を担当してくれる人に「誰か出来る人」と呼びかけてもらっているわけではないんです。一緒にいろいろな活動をしているうちに、何か“きらっ”と光るものを感じることもあるんです。そこでその方をお願いしてみようと思ってやっていたら、本当にすばらしい力を発揮してくださったり…。私たちの年代はそういうアナログチックなところで動くんです。おっしゃるようなデータ分析というのは、若いときにはやったけれど、今はやってないの。ごめんなさい。（会場笑い）地域ってそういうところの集団。そこへあなたのような若い人が入ってきてくださって、アナログチックな個人技じゃダメだよって言ってくれるのを待っているの。（会場笑い）だから、一緒に勉強しましょう。（拍手）

家森 ありがとうございます。

奥山 どうでしょうか？ 会場の方からも是非。



参加者 ありがとうございます。地方議員でございます。先ほどもおっしゃっていましたが、組織にどうやって横車を刺して行こうかと思っています。お聞きしたいのは、うちでも居場所や学習支援もやっていますが、作れば人が来るというわけではなくて、本当に来て欲しい人にどうやって来てもらうかということが大事だと思います。どうやって来てもらうか。居場所を作っているいろんな人がきてくれれば、そこからさまざまなことができると思うんです。あたたかくて美味しい食事とか、何ら

かの来てもらえる要素があると思うんですが、来てもらうための背景というか、どのように感じておられるか、教えてもらいたいです。

杉浦 今、自分のところでは2カ所で学習支援をやっています。食事を出しているところと出していないところがあります。出していないところも週1回で7名、来ています。きっかけは、学習支援については市の生活福祉課という生活困窮の窓口の方からの紹介で、「こういうところがありますよ」「（お子さんの学力が）心配だったら、どうですか？」ということで、来ていただいているのが一つ。行政としては、サポートを必要としている人を把握していて、それ（サポート）をうちができるのは大事なことかなと思っています。あと、対象は別に生活保護ではなくて就学援助ということになっているので、じわっと口コミで広がっています。もう一つの古民家を使ってやっているほうには校長先生が何度か遊びに来てくださって、「援助が必要な子がいるんだけど、中学校に上がっていくと僕らは見られないので、ここに繋ぎたい」と繋いでくださった。何とそこは7人兄弟で、その子は7人兄弟の4番目。7番目の子が小学校に上がったということで、全員来るようになりました。どこか繋がりがから繋がって来るというのが、現実的で、ふらっと来るのはどこかで聞いて来た方。



山田 親子の来場のきっかけで、一番多いのは口コミです。公園などで、名前も知らない親子から紹介されたという方が一番多いです。次に保健センターの紹介。札幌市のこにちは赤ちゃん事業（乳児家庭訪問事業）は助産師さんが各家庭に出向いているのですが、その際に「そろそろ親子で地域に出かけていくなら、こういうところがあるよ」と、区内の子育てサロンの情報が掲載されているチラシを置いてきていたので、それを握りしめて出掛けてくる親子も多々います。

また、今回の研修交流会の12ブースの屋台方式を考えるきっかけになった方で、当日もブースを担当していただいたのですが、市立幼稚園で区内の乳幼児親子の教育相談を受けている先生が、「様々な相談を受ける中で親子が安心して過ごせる地域の居場所を紹介したいが、実際に見たことがないので自分の目で確かめたい」とてんてんに来られて1時間半くらい情報交換した後、「これからは安心して紹介できます」と言って帰られました。その方とのやり取りを通して、連携先と顔の見える関係を築くことの大切さを実感したとともに、相手も連携先を探していて相手のことをちゃんと知りたいと考えていると実感しました。

加藤 17回引越しています。17回も引越していると、（どこにいても）自分は完全によそ者で、こういうところに誰か来



てくれるなんて奇跡だと思っています。来てくれるほうが奇跡だと思っていて、来ていない人にはあまり思いは馳せてなくて、来てくれた人がどれだけここで楽しい思いをしてくれるかという発想をしていると、その人がまた口コミで広げてくれて。5年半経ったら、知らない人の紹介で来た人も結構いて。それがお医者さんだったりするんですよ。こっちも、どうして知らない病院が紹介してくれたんだろうと、そういう不思議なことも起きています。そういう偶然と、相棒の水野さんが高校の巡回相談員をしています。

参加者 スクール・ソーシャル・ワーカー？

加藤 いえ、発達で気がかりのある高校生の相談を教育センター所属でやっていて、そこからもカフェに来てくれます。そんないろんな繋がりの中で、「あそこに行ってみたら」ということで来てくれることが、とても多いです。

参加者 ありがとうございます。

當間 どうもありがとうございました。ちょうどお時間ということで、次に繋げていきたいと思います。どうもありがとうございました。(会場拍手)

## 閉会挨拶

### につぼん子ども・子育て応援団企画委員

前三鷹市長 清原慶子



みなさま、こんにちは。につぼん子ども・子育て応援団の企画委員を務めております、前三鷹市長の清原慶子です。

まずは本日、長時間にわたりまして、熱心にご参加いただきましたみなさまに、心から感謝を申し上げます。どうもありがとうございます。

そして今日は、貴重な基調講演をしていただきました、我々が大日向雅美先生には、何よりも、先駆的な実践に基づいたお話をさせていただいたことにお礼申し上げます。

そして、「ドカ雪」の札幌市から来ていただいた山田智子さん、岐阜市からきていただいた杉浦陽之助さん、砺波市から来ていただきました加藤愛理子さんには、前向きに、子ども・子育て支援に留まらない、さまざまな取り組みを開拓してこられた、生の実践をお聞かせいただきましたことに御礼申し上げます。

そして、この事業でございますが、清水肇子理事長をはじめ公益財団法人さわやか福祉財団の委託を受けて、『2019年度地域まるごとケア・プロジェクト委託調査の報告会』、みなさまとの交流会として、弊団が企画をさせていただきました。

「地域まるごとケア」とは、大変に難しい課題です。何よりも、「地域ぐるみ」で進めようと、キーワードとさせていただいたのは、「市民発」「真剣に」、「ごちゃまぜ」で「まるごとケア」であり、これらのヒントをみなさまに差し上げるということです。みなさま、受け止めていただけたでしょうか？

(拍手。次第に大きくなる)

無理やり拍手をお願いしたみたいですが。(ますます大きくなる拍手)

ヒントというのは、登壇者のみなさまが、まさにそれぞれの地域で、地域ぐるみで、まるごとケアの取り組みを目指して努力されているからこそ提示できたのです。

「まるごとケア」の事例として、例えば、今日、大日向先生には、「シニア世代が子ども・子育て支援と出会うとき」と題した基調講演をしていただきましたけれど、私は「シニア世代を子ども・子育て支援と出会わせちゃった大日向先生」のお話を聴かせていただいたと受け止めました。

すなわち、シニア世代が子ども・子育て支援活動を開始するきっかけをもたらすには「仕掛け」が必要であり、シニア世代が信頼を得て真剣に取り組むには、一定の研修という「仕掛け」

が必要です。しかも、参加者には「仕掛け」とは感じ取らせないような、そうした自己実現の取り組み事例を話していただきました。

私は、今日の報告会で出て来たいいくつかのキーワードを、「自」という漢字で始まる言葉で受け止めることができました。

それは、「自分ごと」で、まるごとケアに参加する。でも、「自由」で、「自立」していなければならない。それを「市民発」で、(登壇した)みなさまは進めて来られました。そして、支援される人も、支援する人も参加者は「自己実現」の喜びを感じてくださっています。同時に支援する人は「自己啓発」の機会を大切にしていってほしいです。

そして、私は、この3名の登壇者のみなさま、そして大日向先生は、人を惹きつける磁石のような方々であると思いました。人々を吸い寄せるマグネット、磁石のようだ。

そのお人柄、何よりも自分の時間を削って、子どもたちのために、障がい者のために、シニア世代のために、子ども・子育て世帯のためにご努力をしてくださっていることを、会場のひとりとして受け止めることが、私にはできました。

もう一つの「自」の付くキーワードは、私もつい最近までは市長をしておりまして、「自治体」の「自」がなくてはいけない、こういうふうに思いました。(拍手) 市民と自治体との協働がなければいけないと思いました。

私は、市長時代に児童館を「多世代交流のセンター」へと名前を変えましたが、「ごちゃまぜセンター」にすべきだったと、今は後悔をしております。(会場 笑い)

やっぱり子どもは、シニア世代と出会い、そしてシニア世代は子どもと出会うことによって生きる勇気、生かされる感謝を得られるんだと思います。

どうぞ、みなさま、今日の報告会を通じて得られたものを、それぞれの地域で、「市民発」、そして「真剣」に、「ごちゃまぜ」の「まるごとケア」として、魂を入れていただければ幸いです。結びに当たりまして、ご参加いただきましたすべてのみなさまに感謝いたしますとともに、「につぼん子ども・子育て応援団、これからも応援してください!」とお願いをして、閉会の言葉といたします。今日はどうもありがとうございました。

2020年2月8日  
2019年度地域まるごとケア・プロジェクト  
調査&交流会開催報告会  
参加者アンケート

参加者数 78名 回答数 29名 回答率 37%

1. このフォーラムをどこでお知りになりましたか？

- ・応援団メールマガジン (10) ・友人・知人からの紹介 (5)
- ・応援団からのメール (4) ・他団体からの紹介 (4)
- ・チラシ (2)

2. 報告会の感想をお聞かせください。

- ・大日向先生のお話がとても勉強になった。地域での男性の参加、巻き込みの方法を活用したい。潜在的な力を感じた。(5)
- ・中高年の男性を巻き込んでいくことの大切さと重要さを感じた。かわりのきっかけ作りの大変さを思った。関わり人はたくさんいるので、第一歩ができれば、何とかなると思った。
- ・男性の子ども・子育て・家族支援養成講座にチャレンジしたい。「ごちゃまぜ」わが団体もまさに同じで20年以上やってきた。どこにもわかってもらえず、お金もまわってこないまま楽しんでいる。
- ・男性の巻き込み方に悩んでいたのが、「あい・ぼーと」の活動を楽しく聞かせてもらった。
- ・広場としての価値観をそろえることが第一歩だと思っているので、「まちプロ養成講座」の内容に興味がある。
- ・大日向先生の声のトーンが心地よく、いつまでも話を聞いていたい感じだった。
- ・いろいろなスタイルの実践報告は大変参考になった。ヒントをたくさんいただきました。
- ・実践報告がとても参考になった。自己実現、自己啓発に自治体も関わるべきことが納得できた。
- ・目の前にいる人に何かできることはないか、という思いで突き動かされているパネラーの皆さんの活動が本当に地域に必要とされていると感じた。
- ・加藤さんの考え方に納得できた。「ないもの」ではなく、「あるもの」に目を向けていくことで、出会いが生まれる。加藤さんの「一緒に生きていけたらいいなぐらいで」が印象的だった。
- ・加藤氏の話聞き、「田舎にある大きな家をなんとか使えないか」と心が動いた。
- ・参加して心がほっこりとなった。「みやの森カフェ」の話はとても興味深かった。
- ・自分の住む地域も札幌と似ている部分があり、共感を持って「かざぐるま」の話をきいた。
- ・どの団体の方もとてもしっかりした考えの元に行動、実現されていることがすごい。
- ・現在、考慮中の子育て支援策についてかなり関連性があったので、参考になった。考えの整理ができた。
- ・登壇者の方々のような活動が自分の地域にももっと広がってほしいと思った。
- ・皆さま、いろいろと考えて楽しく活動していると思った。
- ・すばらしかった。「まるごと」の4文字にすべてが凝縮されている。励みになった。
- ・ごちゃまぜの可能性について考えさせられた。
- ・いろいろな支援の方法があることが興味深かった。
- ・私が目指しているものにつながった。

- ・やってみよう、おもしろそう、の気持ちが大変。
- ・「きょうだい児」の言葉の意味を始めて知った。
- ・今日、知ったことを多くの人に話していきたい。
- ・21世紀の少子高齢化社会をつまびらかにし、一人一人が地域の中で活躍できるようなメニューを提案して下さった。
- ・「ともにたたかう仲間」「ビジョンを持つ」が心に残った。
- ・昨年のキーワード、TTP（とことんパクリ）を実践していきたい。

3. 地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください。

- ・これから新しくつくる居場所づくりも、市民発・ごちゃまぜ・真剣・まるごとケアをめざします！(2)
- ・子育て支援拠点のスタッフとして働いているが、色々なつながりを求めていると思った。(2)
- ・子どもは社会の宝物。子育てを楽しめる親が増えていくような地域にしたい。(2)
- ・あまり身構えないでしかけないで、そのまま向き合うことを大切にしたい。
- ・「じゃあ、あなたはどのようにするのか」が引き続き問われていると感じた。
- ・虐待予防のために、地域のネットワークづくりをしていくことが必要だと感じた。
- ・まるごとケアを考えると、個々ではなく、さまざまなところの問題がつながっていると感じた。少しずつ考えていきたい。
- ・地域の声に耳を傾け、ビジョンを持ちながら頑張る、そういった支援者になって優しい地域にしたい。
- ・誰でもできる、どこでもできる地域まるごとケアのうねりは昔から続いている。消さないことが大切。
- ・私たちのNPOも「ごちゃまぜ」いろいろな形で独立させて活動している。また、やりたいことを見つけた。
- ・行政をどう取り込むか、特にタワマンのような住居空間にいる市民をどう巻き込むかが悩ましい。
- ・ごちゃまぜを地域に広げていくために頑張らなければ！
- ・生きがいを実現できる地域づくりを目指している。誰もが支え手になれる、たとえ認知症になっても活躍できる地域が理想。
- ・仕事で子育て支援をしているが、自分が地域で何かできるのでは、と思った。
- ・それぞれに役割がある。それぞれが「当事者」である。
- ・今後はごちゃまぜの形が増えるのでは、と思った。
- ・微力でも無力ではないことを信じて、少しずつやっていきたい。
- ・「あそこに行けばなんとかなる」広場づくりをしていきたい。

4. 地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご提案などがあればお聞かせください

- ・もっと自治体に声をあげてください！
- ・ユニークな中高年参加の子育て支援の事例をたくさん紹介してほしい。
- ・一年に一回、ここへ来るとパワーをいただいて帰れます。
- ・力強くがんばってください。
- ・九州でもこういった交流会を開いてほしい。
- ・もっと広報してもらおうと良かった。難しい会と思っていたが、来て良かった。
- ・他団体とリンクした活動を。

2019年度地域まるごとケア・プロジェクト 報告書

2020年 3月 31日発行

発行所: にっぽん子ども・子育て応援団



郵便番号 162-0853

東京都新宿区北山伏町 2-17ゆったりーの共同事務所内

電話 & FAX 03-3269-3314

Mail: info@nippon-kosodate.jp

URL: <http://nippon-kosodate.jp/>

デザイン: 認定 NPO 法人びーのびーの 地域 remix

この報告書は、公益財団法人さわやか福祉財団からの委託事業により作成いたしました。

(c) Nippon Kosodate Ouendan 2020, Printed Japan

この報告書の無断転載・複製は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。